

飯田大学連携会議「学輪 I I D A」第2回全体会 (公開セッション・来賓あいさつ)

平成24年1月28日

○牧野市長

来賓者の方々からコメントをいただければと思います。

まず、総務省人材力活性化連携交流室の澤田室長様、よろしく願いいたします。

○澤田総務省人材活性化連携交流室長

皆さん、こんにちは。総務省の澤田と申します。

私は、総務省の地域力創造グループという部署で、地域活性化に向けまして地域人材の育成ですとか、様々な連携交流を担当しております。

本日は、大変感銘を受けました。それはやはりこの飯田市という地域は、自然、文化、歴史、産業の立地基盤、そして土地そのものですとか、また公民館から最近では観光公社と呼ばれるようなそういう仕組み、そして何よりも地域の人材といったものが、非常に大きな可能性とポテンシャルを持っているということがわかりました。それを今後さらに高めていくには、大学との連携というものが非常に有効であると思った次第でございます。

今日も大学との連携ということの中では、様々な分野での連携がありますが、今まで大学との連携というと、どちらかというとバイテ（特定の分野、特定の先生方との連携）というのが多かったのですが、まさに地域おこし、地域づくりというのは総合分野ですので、まさにこの様々な分野の方々と連携していくことこそ、今後の地域づくりの本質であり、そしてそのような方々と大学とを、そして大学の先生、大学の学生と手を結んでいくというのが大変重要であると、それが今後よき日本のモデルになっていくのではないかという予感を感じましたし、それぞれの先生方、そして学生の方々のご努力とその熱意に感銘を受けた次第でございます。

そのなかで何が一番大事なかなというふうに思いましたのが、そのポテンシャルも大事ですし、先生方の取り組みというのも大事だと思うのですが、何よりやはり私は関係性かなというふうに思いまして、やはりその牧野市長をはじめとする市役所の方、そして市民の方と大学の先生方との関係が深まり、そしていろいろな取り組みを深めていかれることがポイントなのかなということ強く思います。

今日、域学連携の地域づくりに関するシンポジウムの資料を配布させていただきました。総務省では、域学連携（地域と大学の連携）は非常に重要であると思っております。域学連携というのは、大学にとっても学生にとってもメリットがあり、また地域にとってもメリットがあるというような形でないとうまくいかないですし、それこそ本質であると思っております。そのようなことでシンポジウムを開催させていただきます。

実は私どもで全自治体を対象に大学連携に関するアンケートを実施したところ、大学と連携をして

いる自治体が全国で約4割ございました。今は実施していないけれども過去も実施いたところも含めると約5割ございます。今は実施していないけれども、今後実施したいという自治体は200近くありまして、皆さんに聞いてみますと、大学とどんな連携ができるのか、そして大学とうまく連携するにはどうしたらいいのか、ということを非常に悩んでおられることが分かりましたので、それを徹底的に考えるシンポジウムというものを開催したいと考えています。シンポジウムを実施するにあたり牧野市長に講師を依頼したところ、大変お忙しい中ご参加をいただけるとのことでした。今日のような話を深めてご示唆をいただけるということですので、本日ご来場の皆様も是非ご参加をいただければと思います。

それともう一つ、資料裏面をごらんいただきますと、来年度新しい取り組みを考えております。この域学連携の事業をさらに深めていくためにも、大学の単位化につながるとより深まっていくだろうということで、全国で先進的あるいは独創的といわれるような事例調査をしたいと考えています。予算1,500万円、約15カ所に調査研究事業を委託させていただきたいと考えており、地域と大学の皆さんで実行委員会を作ってください、そこにこの調査をお願いするという形で実施したいと考えております。

総務省では、このほかにも特別交付税による支援、定住自立圏、あるいは地域おこし協力隊、アドバイザーといったような様々な支援ツールもございますので、そういったものと一緒になって合わせてやっていただくと、よりこの域学連携実証事業もより充実していくのではないかと考えています。

その一つの大きなヒントが、今日あったのではないかと考えています。

以上でございます。

○牧野市長 ありがとうございます。

それでは続きまして、リニア将来ビジョンの座長も務めていただいております、財団法人都市づくりパブリックデザインセンターの小澤一郎先生、よろしくお願いたします。

○小澤財団法人都市づくりパブリックデザインセンター理事長

ご紹介いただきました小澤でございます。

私は現在、財団法人都市づくりパブリックデザインセンターにいますが、元々は建設省におりましてずっと都市計画をやってまいりました。飯田との関わりですが、現在私は都市計画学会で低炭素社会実現特別委員会の委員長をしていますが、低炭素都市づくりを実際にどのように進めようかということで、平成15年に飯田に飛び込んでいきました。大都市モデルと地方都市モデルを考えていたわけではありますが、地方都市は是非飯田がモデルになってもらえないだろうかということで、いきなり市役所の担当課長の門をたたきまして、それから一緒に勉強させていただいたという経緯がございます。それが今、都市計画学会の低炭素社会実現特別委員会で、全国の都市の低炭素都市づくりや都市計画としてどのようにやっていくのかということにつながっています。

実は、少し専門的になりますけれども、都市計画はこれまでエネルギーのことは全く考えていませ

んでした。土木建築、造園的な仕事だけしかやってこなかった。それだけではこれからの社会の課題に対応した都市計画、まちづくりはできないなということで、これからは都市計画の中にエネルギーを重要な柱としてきちんとビルトインする必要があります。そうなるが一番重要なのは、地域にあるエネルギー資源をまちづくりの中で徹底的に使いこなすことです。

その結果どうなるかという、地方都市はできれば50%くらいの目標でエネルギー自立圏にしていくと、石油が入ってこなくても原子力が止まっても、大都市は生き残れないけれども、地方都市は食料もエネルギーも何とかやっていけるというそういう国土づくりをする、そのためのまちづくりをするというようなことで、是非そういうような取組みを飯田でやっていただけないでしょうかというところからスタートしました。

その後リニアの問題があり、駅をどこに造るかということで市長はとてもご苦労されたのですが、地域の方々も大変な熱意を持って是非現駅に、中心市街地に、ということであったわけです。ところが、鉄道の事業の論理からいくと、できるだけあまりお金のかかるのではなく、郊外の方が良いということで、いろいろあったわけですが結果的に落ち着きましたけれども、そのときに国土政策、都市政策の視点から見るとやはり中心市街地が良いということで、東京側で若干のお手伝いをさせていただいた経緯がございます。

関心事は以上のとおりですが、これからの日本の閉塞状況を打破して、新しい国土の形成をする、あるいは都市の再生をするということで行きますと、低炭素化をどう進めるか、それからリニアをどのようにいかすのか、この議論があまりされてないように思えます。

リニアはものすごいインパクトです。この辺のことを含めて、これからの国土デザイン、地域デザイン、都市デザインをしっかりしないといけないということと、3.11以降は大規模災害が起こったときのリスクマネジメントを、これからの国土から都市のデザインにどのように織り込むのか、そのときにこの地方都市と大都市との関係をどうするのかなど、そういう意味でいくと、やはりいろいろなことを考えるとこの人材のことも資源のことも考えると、この飯田がすごく重要な拠点になるのではないかと考えております。

これからも一緒に仕事をさせていただけたら非常にありがたいと思います。よろしく願いいたします。

○牧野市長

ありがとうございました。

続きまして、長野県下伊那地方事務所長の久保田所長、よろしく願いいたします。

○久保田下伊那地方事務所長

長野県下伊那地方事務所所長の久保田でございます。

私はこちらの出身なものですから、本日17の大学の先生方が、このふるさとであります飯田地域の良いところを褒めていただいて、大変うれしい思いであります。

元々飯田下伊那の人間は謙虚な人間が多いものですから、あまり褒められるとなんかちょっとくすぐられたような変な思いがありますけれど、多くの先生方が見ているこの魅力というもの、文化の蓄積であったり、あるいは政策の先進性であったり、様々なものについてはもっと自信を持って、悪のりではありませんけれど、前向きにとらえる必要があるのではないかと思います。

そんな話の中で、今リニアの話が少し出ておりましたけれども、あと15年後にリニアのルートが開通して駅ができると、こういう中で大学の先生方から、将来像としての空間イメージがないというような指摘もいただいて、県の立場で言いますと、この飯田下伊那地区の14市町村と一緒にあって、あるいはこの14市町村で構成します南信州広域連合と一緒にあって、県としてもリニアを契機といたしました地域づくりについて、24年度は研究していきたいということで、今、県の予算編成の中で努力しているところであります。

いずれにしても、この魅力とそれからリニアのインパクト、そしてこの飯田市を中心としますこの地域の大学とのつながりの志し、これを持続することが大変重要だと思えました。

私も県の立場で言いますと、こんなに多くの大学がこの地域をフィールドにして研究していただいていると、そのことは全く残念ながら知っておりませんでしたので、今回非常に驚きを持って、地元にいながら驚きを持って勉強させていただきました。

そんなことで長野県といたしましても、この地域と一緒にあって、この飯田下伊那地区の将来に向けてのビジョンづくりについても一緒にあってやっていきたいと思っておりますので、またその節はよろしくお願ひしたいと思います。

本日はどうもありがとうございました。

○牧野市長

ありがとうございました。

続きまして、地元の産業界から多摩川精機株式会社の萩本社長、よろしくお願ひいたします。

○萩本多摩川精機社長

ご紹介いただきました地元の多摩川精機で社長をしております萩本と申します。地元であるという立場から、今日のお礼を申し述べながら感想をお話ししたいと思います。

そもそも私は、産業人ですし経済人でもございます。まず、経済評論をここで申し上げるつもりはないのですが、ただ、今日の日本経済は、つい先日の貿易収支の赤字発表にありますように極めて厄介な事態となってきています。とりわけ輸出産業は危機的な状況になりつつあるということがあります。

これは日本の地域に間違いなく大きなダメージを与えることだろうと思っているわけですが、この地域にとっても極めて厳しい問題が直面しているというふうに思っています。

実はこの地域は、80～90年前に当地の主産業であった蚕糸産業を失って、産業の大転換を図らなければならなかったという歴史を過ごしてまいりました。そして今、それに類するような産業

の転換点を迎えていると思っています。

この新しい産業の転換点、この時代を地域としてどう受け入れていったらよいのか、サステイナブルな地域づくりというお言葉もありましたけれども、そういう意味で、今日こうして開催されました「学輪 I I D A」という企画の意義はあるのだろうと思います。そういう意味で、先生方の研究成果に興味深くお聞きをさせていただきました。この点については、深く感謝を申し上げたいと思います。

ただ、この成果を、地域課題の解決にどう結びつけていったらよいのか、そういうことを思いながらお聞きをいたしておりました。それを地元がしっかりと受け止めて、地域政策に落とし込んでいく、具体的な政策に裏付けていく、そういう地域のマネジメント力そのものがここで問われるのではないかと思った次第であります。

先生方には、スタディフィールドとしての飯田という、そういう研究対象のお立場からもう一歩踏み込んでいただいて、是非、飯田という地から世の中を見、飯田という地に軸足を置いたときに、どういうふうに先生方の研究に違った色合いを出していただけるか、そういうことを是非私としては、地元であるが故に、研究成果にだけで終わらないようお願いしてほしい、お願いしたいということを、感想を含めて申し上げましてお礼に代えさせていただきます。

ありがとうございました。

○牧野市長

ありがとうございました。

もう少々だけ時間がございますので、ネットワークのご専門であります N T T データ経営研究所の萩原センター長さん、いかがでしょうか。

○萩原 N T T データ経営研究所長

皆様、先生方、本日は大変刺激的な面白いお話を聞かせていただきまして、大変ありがとうございました。

実は、私自身は大学まで東京にいたのですが、東京育ちなのですが、大学を出た後に、実はこの恵那山を越えた反対側にあります中津川市というところに 13 年半おりました、そこで仕事をしていました。そのときに実は飯田にも少し関係があり、飯田に来たことがございまして、そういう意味では 30 年も前の話でございますけれども、ここでまた飯田の地を訪れることができたのも、何かの縁ではないかと思っています。

私自身はその後日本総合研究所で環境問題のコンサルティングをずっとやってきまして、それから現在の会社に移り、環境コンサルだけでなくライフサービス、医療や地域のコンサルをやってきて、今は脳科学、これを産業に生かそうというコンサルティングをしております。そういう中でいろいろなところを見ると、実は今日の話の中ですごく参考になったところがたくさんございました。

これはおそらく市長の発案だったのではないかなと思いますが、これだけの大学の先生方、ある意味で知を集積したというのが、これはすごいことだと思って、大学が飯田になかったから、逆にそれを利用したということでしたけれども、これは一つの新しい考え方だと思います。

その中で実は、例えばですけれども、信州大学の田中先生がおっしゃられた文理融合という話がありましたけれども、これはすごく重要なこれからの話だと思います。脳科学をやっている最近特に思うのですが、文とか理とかいうのは人間が勝手に分けただけで、実は人間の脳の中は文も理も一緒なんです。そういう意味では、こういう文理融合の考え方と連携協定は、非常に面白い考え方ではないかと思いました。

それから、いろいろな先生方が飯田の魅力ということで、人とか、自然とか、そういう話をされていましたが、多分この魅力というのは、人と人との絆をつくることの強さが、もしかしたら魅力なのではないかと思いました。

実は最近、知能指数IQに代わってEQという形でエモーショナルというふうにいわれてきましたが、最近話題になっているのはSQですね。社会性の指数というのは、人間にとってどれだけ重要かといわれるようになっていまして、そういう意味では、この地の人たちが持っているSQというのが、これから非常に重要になるのではないかと思います。

あと一つだけ申し上げたいことは、先ほど京都外大の高島先生がリニアをきっかけに新しい文化ができると、その文化と今までの文化をどう融合するかという話をされましたが、これはすごく大きなことです。

私、実は先週福岡にいましたが、福岡は新幹線が鹿児島まで開通したことで間違いなく人が増えています。鹿児島から週末になると買い物に来るのです。それだけ新幹線の駅ができるということの魅力は大きいです。ただ一方で、福岡は栄えていますけれども、では鹿児島はどうか、熊本はどうかという話が出てきます。

リニア開通まであと15年ということですが、実際15年というのはあっという間だと思います。15年経ってからその対策を考えるということなら、たぶんだめですね。そういう意味では、今から飯田がどのようなまちをつくるのかというのは、とても重要な取り組みになるのではないかと、そういう意味では、ここにいらっしゃる先生方の智を上手に使っていただきたいと思います。

特にこれから新幹線の駅ができて何をするかといったときに、大体昔でしたら企業誘致とかあったわけですが、企業誘致はおそらく意味がないですね。企業誘致というと、おそらく皆さんの考えが、工場を持ってくる、研究所を持ってくる、それでは企業には全然お金が落ちないのです。

やはりこれから重要なのは、やはり智を産業にするという、例えば先ほどありました多摩川精機の社長さんの話がありましたけれども、おそらくそういうところに勤める、若い人が勤められる場をどれだけつくれるかということだと思います。

これはたまたま先週九州に行ったときに話が出たのですけれども、地元に戻りたくても、大学で勉強して優秀な知識を持った人が活躍する場がないというのが一番大きな問題なのです。ですから、それをどうやってつくっていただくかというのを、是非考えていただきたいと思います。

どうもありがとうございました。

○牧野市長

ありがとうございました。

最後に教育界の立場から、杉並区の和田中学校の代田校長先生にお願い致します。

○代田杉並区立和田中学校校長

皆さん、どうもありがとうございました。

私の自己紹介をさせていただきますと、私は鼎の出身で、現在、杉並区立の和田中学校の校長をしています。いわゆる民間人校長ということで、ビジネスで会社を経営しておりましたが、その制度の中で指名をされ、今、4年目を迎えるということです。

民間人校長ということで珍しくて、いわゆる文科省の政策委員や、内閣府の特区の仕事なども併せてさせていただいています。

今日、牧野光朗さんとは中学の先輩でもあるのでお招きいただいて、さすがだなというふうに思いました。これだけの智の結節というか、知の集積が飯田でできているということを私も誇りに思いました。また、先生方のお話の中で、飯田はすごいとか、サステイナブル、持続可能なというようなことを聞けば聞くほどうれしいのですが、その一方でとても違和感を覚えました。

というのは、私もそうなのですが、約8割の若者が一度飯田から転出します。そのうち私の感覚だと半分は戻ってくるのかなと、数字を見ると4割と書いてありましたが、現実的には半分以上は戻ってこないのですね。そのくらい飯田の地には吸引力がないというのも現実だと思います。東京で飯田の高校の会がありますが、飯田に戻るといふ人はなかなかいないですね。そういう現実を踏まえると、飯田がすごいとか、言われれば言われるほど違和感を覚えたのも事実です。

ただ、そのポテンシャルがあるのだらうなというふうに思います。そのポテンシャルを今後15年、リニアが通るといふきっかけを通じてどう発想を転換し、今の中学生や高校生がやはり飯田に戻りたいという地域にしていくか。残念ながら今はたぶん、地域に誇りが持てないのだと思います。

ここが研究対象としては面白いのだけれども、今の飯田の若者にとって誇りのある地域というものをづくりあげていかないと、研究対象で終わるし、新幹線と同じような一過性の観光地になってしまう。多分そういうところを乗り越えた発想の転換で先生方の研究をいかし、また地域住民の人たちが本気でやらないと難しいことだなというふうに思っています。

冒頭の牧野市長の発表資料に、飯田版ダボスというふうにありましたが、私もその言葉にはとても共感をしています。多分日本の人たちはダボスに行きたい、ダボスで智の出席をしたいと思うんですけれど、今度は世界中の人たちが、飯田でこの智の集積に出席をしたというくらいのイメージ

を作り上げることで、飯田がさらに発展していくのではないかなというふうに思って話を聞かせていただきました。

私もとても勉強になりました。本当にこういう機会を作っていただき、ありがとうございました。

○牧野市長

どうもありがとうございました。

以上をもちまして、学輪 IIDA 全体会公開セッションは終了とさせていただきます。

15分ほど休憩をさせていただきまして、17時、午後5時から「学輪 I I D A」のプロジェクト会議の報告をさせていただきます。

よろしくお願いいたします。